せとかの摘果と果実肥大

せとかは、高価格で高級な果実としてのイメージが強いため、果実外観が美しく、大果で果汁の多い高糖度の果実生産が求められている。このため施設栽培におけるせとかの摘果時期と程度について調査を行い、高品質な大果安定生産のための技術確立を行った。

摘果の時期と程度：摘果の処理時期は5月6月8月とし、5月および6月処理区では葉果比70、100、150の3区を設けた。8月処理区は葉果比100のみとした。5月区は、生理落果中であるため葉果比70の2倍量程度の果実を残し、6月の摘果で最終葉果比とした。2002年3月7日に収穫し、1果平均重、階級割合、果実品質、夏芽発生状況を調査した。

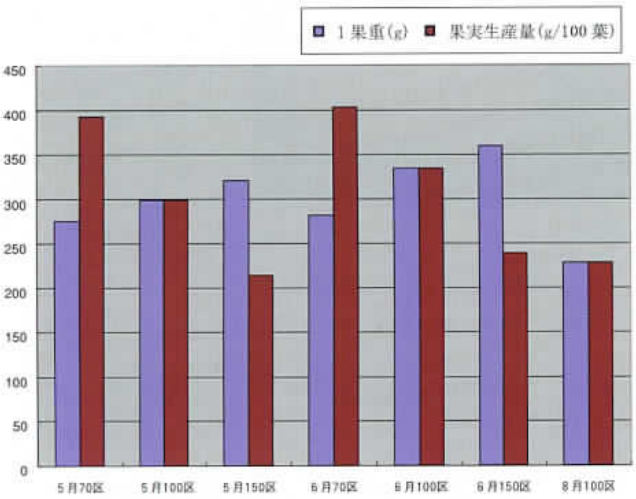

図1　せとかの摘果処理と果実の大きさおよび生産量

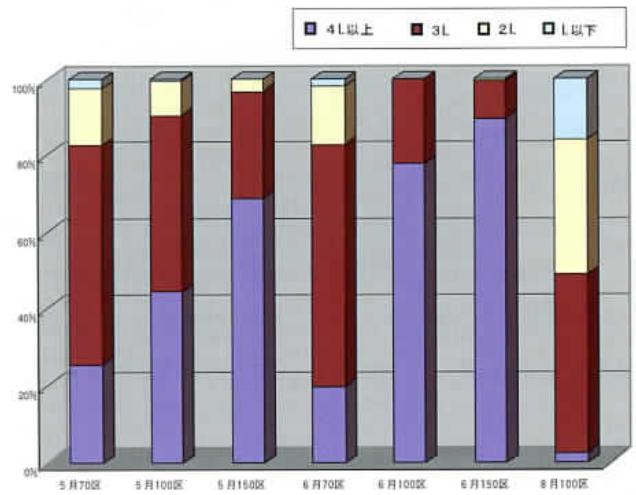

図2　せとかの摘果処理と果実の階級割合

その結果、葉果比は高い区ほど大果となり、摘果の時期は5月区と6月区による肥大への影響は明確でなかったが、8月区は5、6月処理の葉果比100区に比べ小果となり、摘果時期が遅すぎる結果となった。

100葉当たりの果実生産量は、5、6月の70区で大きく、150区は70区の60%以下となった（図1）。各処理区と果実階級の関係は、図2に示したように6月150区で、4L以上が89.6%を占め、次いで6月100区が77.9%であった。

夏秋梢の発生は、5、6月区で葉果比が大きいほど発生量は多くなるが、摘果時期との関係は認められなかった。せとかの夏秋梢は、除去しないで防除等を行い十分に管理すれば、樹勢維持や結果母枝として有効利用できる。

果実品質には、それほど大きな差は見られず、各区とも13度以上の値を示した。クエン酸含量は摘果時期の遅い8月区が最も高く、葉果比では結果量の多い70区が高かった。また、いずれの処理区においても、翌年の着花は確保できた。

以上のことから、葉果比が高いほど大果となる傾向であるが、3Lを目標とし、安定した収量を確保するためには、果実生産量、果実階級割合から見て、6月摘果の葉果比70～100程度が最適管理と思われる。

留意点：せとかの施設栽培では、幼果期に花柱が脱落せず果実に残る傾向が認められるので、生理落果中の早期に花柱のみを摘除することが望ましい（写真1）。

（岩城分場　主任研究員　喜多景治）

写真1　花柱が脱落せずに残ったせとかの幼果